2021年度いわて男女共同参画サポーター養成講座

震災から10年、改めて考える「女性と災害・復興」～『災害女性学をつくる』を踏まえて～

講師　天童睦子・浅野富美枝

講師　天童睦子　宮城学院女子大学教授

浅野富美枝　宮城学院女子大学元教授

講演の内容

１．災害女性学をつくる―東北から立ち上がる新しい視点

２．「人間の復興」と男女共同参画

３．被災地での女性の活動―事例をもとに

４．未来への提言

☆2011年　震災直後から地域の女性支援に携わった浅野と、2015年から宮城学院女子大学で女性学を教える天童がタッグを組み書籍を刊行（2021年）

自己紹介　天童 睦子

天童 睦子　てんどう　むつこ

宮城学院女子大学　一般教育部教授（女性学、教育社会学）

日本教育社会学会理事、登米市男女共同参画審議会会長、日本学術会議連携会員

子育て期、国際関係の業務を経て大学院で学ぶ。博士（教育学）

名城大学人間学部教授を経て、2015年から現職。仙台生まれ。

『キャリアを創る―女性のキャリア形成論入門』編著 2021 学文社

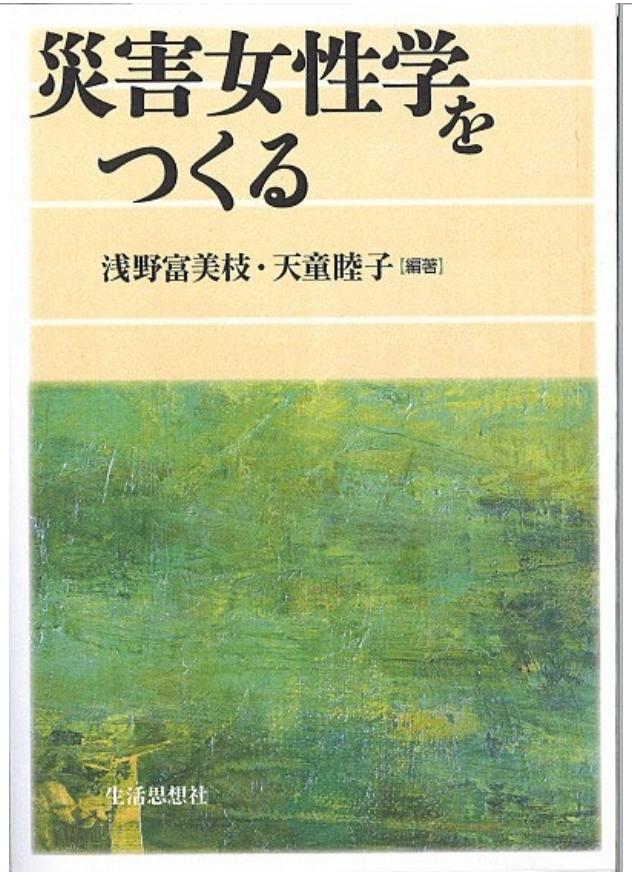
『女性のエンパワメントと教育の未来』2020　東信堂

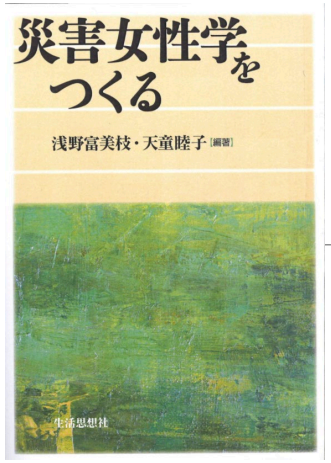
『育児言説の社会学―家族・ジェンダー・再生産』編著 2016　世界思想社

はじめに：東日本大震災から10年 新たな学問がはじまる

自然災害、福島第一原発事故の複合災害に関する文献・書籍は多数刊行されたが、ジェンダー視点による災害研究は発展の途上。

宮城で、また日本各地でこの10年に女性主体で活動してきた市民団体の実践、災害研究を丁寧に辿り、「災害女性学」という新たな学問分野を切り拓いた一冊。（生活思想社 2021年）





災害女性学について

「災害と女性の現実・現場から出発する実践知であり、学際的知である」

「重要なのは、平常時に、可視化・不可視的な社会的・文化的性差別を認識し、是正し、ジェンダー平等を社会の常識とする粘り強い取り組みの継続である。声をあげにくい人々の声をいかに日常的に掬いあげるか、人として尊厳と権利の保障が、防災や復興の道標のひとつとして確立される必要がある。」（序章p.15）

出典：浅野富美枝・天童睦子編『災害女性学をつくる』2021年　生活思想社

本書　章の構成（1）

序章「災害女性学をつくる」天童睦子

第1章「災害と女性の歴史－関東大震災と阪神・淡路大震災を中心に」浅野富美枝

第2章「東日本大震災・宮城県の女性被災者支援と地域防災の取り組み」（宗片恵美子）市民女性NPOの経験をふまえて、2011年東日本大震災発生時、避難所・仮設住宅での被災女性への支援活動の実態を振り返る。

第3章「災害と子ども・子育て支援」（畑山みさ子）「ケア宮城」代表東日本大震災時、　子どもの心のケアにかかわった。

章の構成（2）

第4章「熊本地震と女性」（浅野幸子）

第5章「男女共同参画センターと災害」（瀬山紀子）男女共同参画センターの職員として被災者支援に携わってきた経験

第6章「避難生活における女性支援とその課題―福島原子力災害がもたらしたもの」　薄井篤子

第7章「環境社会学と女性視点」（長谷川公一）

終章　未来への提言－災害女性学から見る課題と展望　浅野・天童

誰に向けて、何を届けたい本か

災害・防災関連科目やジェンダー関連分野を学ぶ若者・学生

小・中・高校の災害・防災教育に携わる教育者、市民

災害研究の専門家、災害・防災教育に関心をもつ社会教育担当者

男女共同参画・女性センター、防災・復興の政策の策定に携わる国や自治体職員、市民諸団体

ことばを紡ぐメディアへ　そしてあなたへ

災害女性学のアプローチで「防災と復興の課題」を読み解く

災害は隠れていたジェンダーの不均衡を浮き彫りにする

復興の道は未だ途上

避難の問題は現在進行形

どの視点から，当時を振り返るのか

→いかなる未来を描くのか

1. なぜ災害女性学が必要か

災害とは一般に、地震や津波といった自然現象や人為的原因により引き起こされた人間の生命、生活、尊厳に著しい影響を及ぼす被害を意味する。ただし、自然災害であっても、災害は人々に等しく影響を与えない。そこには程度の差はあれ、社会的脆弱性と、構造的不均衡を背景に、より弱い立場の人々が被る人為的被害がかかわっている。（序章 P.9）

１－２．東北からの視点　男女共同参画の視点

東日本大震災　正式名称「**東北地方太平洋沖地震**」 **2011年3月11日**

人間の復興とジェンダー平等

いわて男女共同参画プラン　平成12年（2000年）策定

地域のなかのジェンダー・デモクラシー　　女性の声が政治に届く　家庭、地域社会、学校のジェンダー平等

東日本大震災：東北からなにが見えるか

2011年3月11日14時46分、宮城県沖を震源とするマグニチュード9・0の巨大地震が発生

4月11日時点で岩手・宮城・福島の三県で亡くなられた方は1万3135人。 その後東日本大震災の死者・行方不明者　2万2288人：2019年9月末時点・復興庁

災害史上、東北とりわけ三陸沖はこれまでにも大規模地震の発生が複数あった。

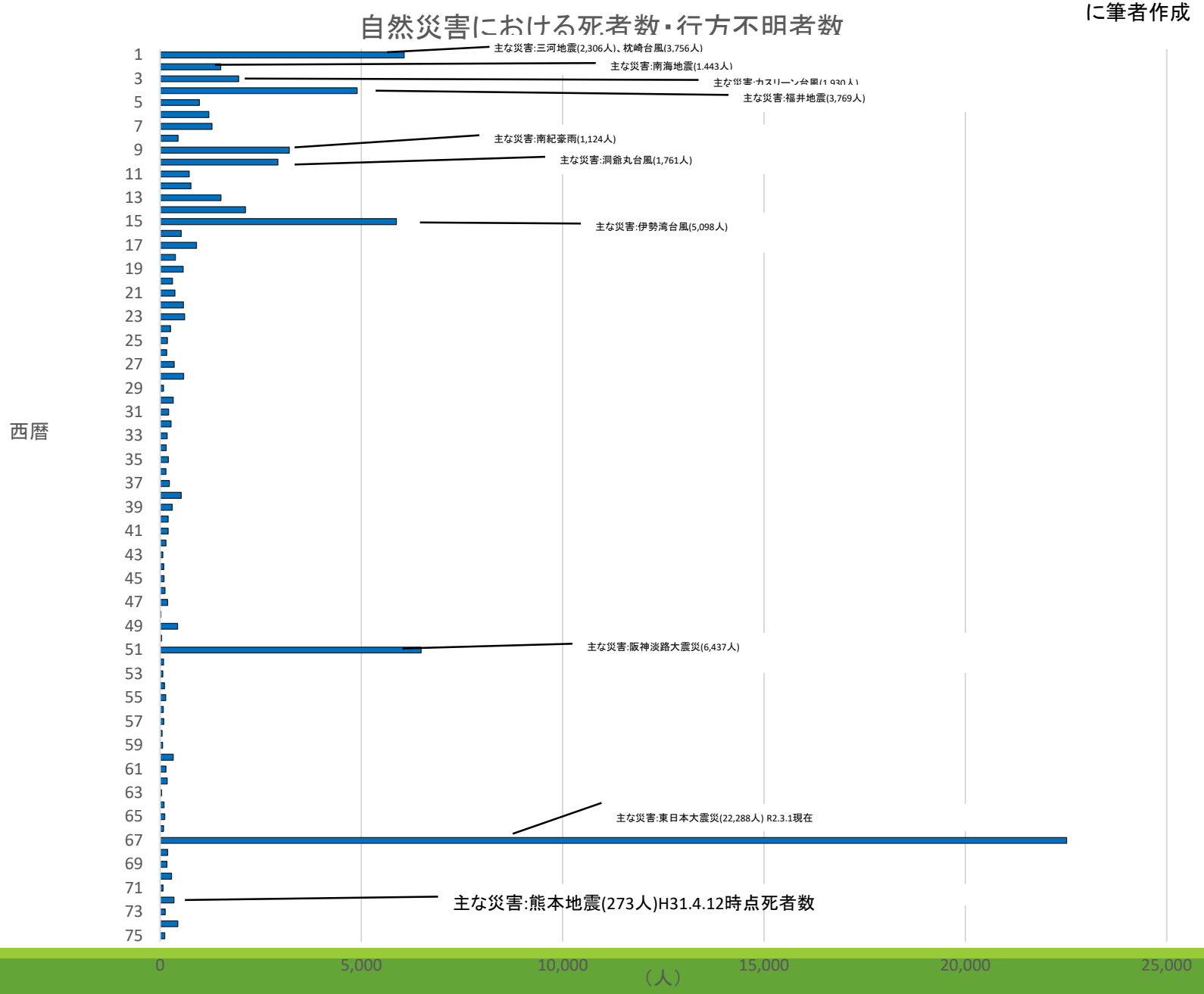
1896年の明治三陸地震津波（明治29年6月15日）

1933年昭和三陸地震（昭和8年3月3日）

1978年宮城県沖地震（昭和53年6月12日）

地震大国日本は、これまでの大規模災害の経験をふまえ、災害への対応を進めてきたはずであった。しかし東日本大震災：震災の規模の大きさと、福島第一原子力発電所事故による複合的大災害の様相を呈し、災害対応の甘さ、不十分さを露呈。

図 「災害女性学をつくる」27ページ　出典: 令和2年版　防災白書記載のデータ、グラフをもとに筆者作成



（注） 平成7年死者のうち、阪神・淡路大震災の死者については、いわゆる関連死919人を含む
（兵庫県資料）平成30年の死者・行方不明者は内閣府取りまとめによる速報値

１－３．阪神・淡路大震災の教訓

ボランティア元年（1995年）とも呼ばれた年「災害時の女性視点の必要性の自覚と政策提言の誕生期」

死者数　　女性＞男性　　女性の死者は男性より36％多かった

社会的脆弱性

生活構造上の不均衡が生死に直結

長引く被災生活・・・震災同居

ボランティア活動・・・性別分業

3.11と女性の経験

東日本大震災において、阪神・淡路の震災時の経験が活かされた点として、国がいち早く女性に対する暴力防止を呼びかけたこと（内閣府 2011年3月16日）、長期の仮設住宅での生活への対応が地域コミュニティ重視の視点で行われたこと。

2000年代以降、配偶者暴力防止法の制定、災害・復興過程におけるジェンダー視点の導入の強調、また地元地域での市民女性グループを中心とする性暴力防止に向けた平常期からの地道な活動など、比較的早期に女性が発言しやすい風土形成が作られていた部分もある。（序章 P.12）

平時と非常時を貫くジェンダーの不均衡

災害時に表出するのは、日常に潜むさまざまな不均衡な関係

避難所運営の性別分業、ケア責任の偏在、女性の家庭責任の強調、DV被害、

世帯主（＝男性）規範もたらす支援体制の偏り、

非正規職（女性多い）の解雇、

防災会議・復興の政策決定の場における女性の不在等、社会・経済・政治システムを貫くジェンダー秩序と暗黙の男性中心主義が顕在化する。

☆つまり、災害発生という非常時には、それまで不均衡を覆っていたヴェールが剥がれ、社会に構造化されていたジェンダー問題が一気に浮上する。それまでジェンダー問題がなかったのではなく、問題に目を向けず、十分対処してこなかったことの表出なのだ。

復興庁　多様性の視点

2020年

①性差（ジェンダー）に配慮した物資の配布

②早期の状況調査と女性の意見が反映される環境づくり

③DV等被害から女性・子どもを守る

④必要な人に必要な物資を届ける

⑤安心して避難できる母子への適切な医療支援

⑥女性が地域の情報発信を担う

復興庁 | 多様な視点からの復興への活動ポイント集 (reconstruction.go.jp)

http://reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-16/20201012175821.html

２．人間の復興と男女共同参画

災害復旧・復興のプロセス　ハード面での復興が注目されるが、被災者の生活再建を中心とする「人間の復興」（福田徳三 1923年の関東大震災に際して提唱）　被災者の生存の確保

阪神・淡路大震災発災直後から注目された（浅野 1章　p.36）

人間の復興・・・市民主権の獲得、人間の尊厳、被災者個人の自律の回復

もう一つのポイントが、女性視点による支援の展開

被災という非常時に、声をあげにくい人々ーとりわけ女性たちが抱える困難

被災者には平時と同様に尊厳ある生活を営む権利がある＝復興の要はなにより「人間の復興」であり、女性視点、男女共同参画（ジェンダー平等）の視点はその中核

→３．被災地での女性の活動

4. 未来への提言（総括）

〇災害女性学　エンパワメントの実践モデル

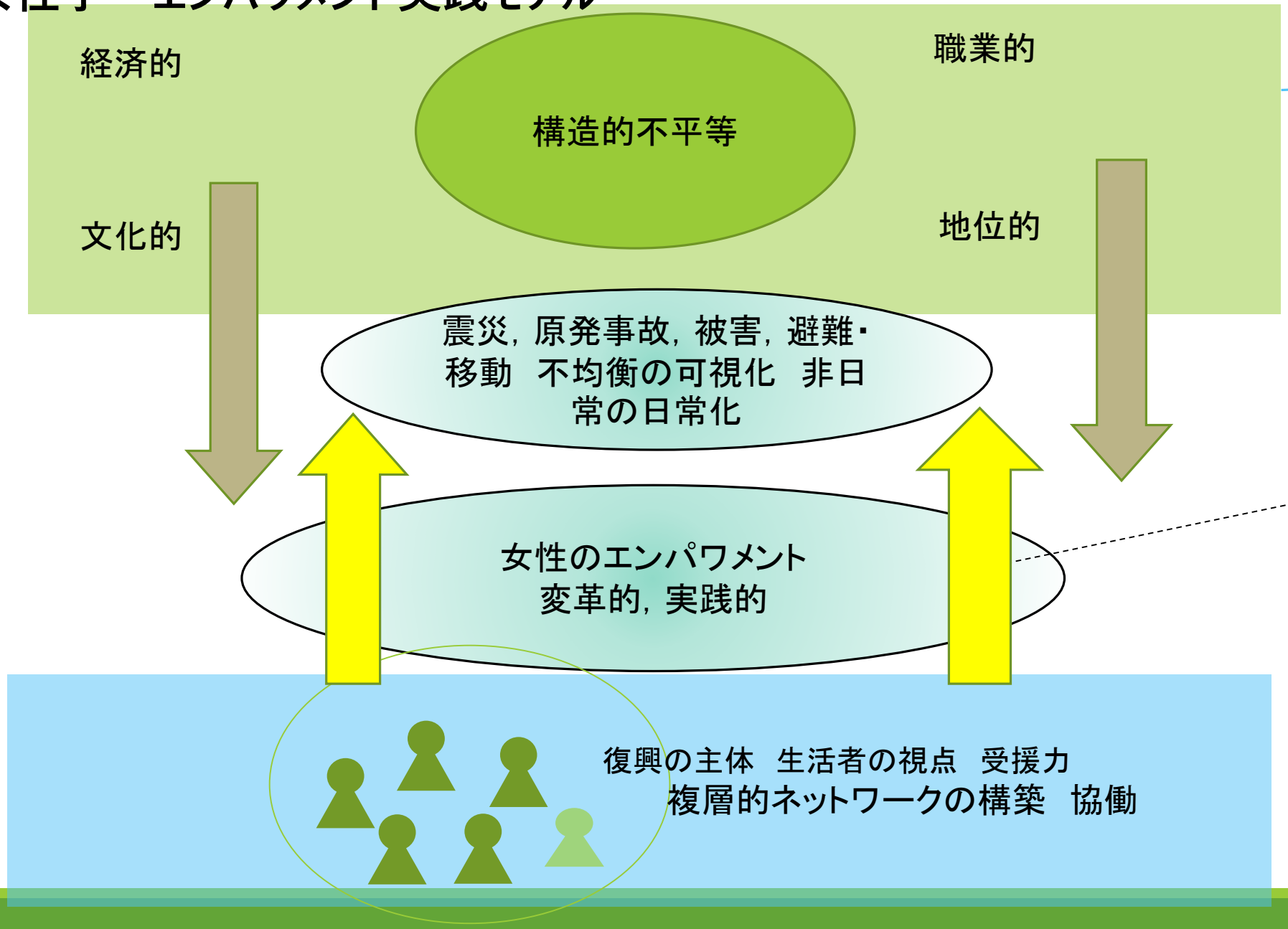
〇次世代・若者とともに考える「女性と防災・復興」

　〇災害女性学は女性だけのものではない

　近年頻発している多様な災害に対して、女性はもとより、社会のなかで困難を抱える人たちの課題に目を向け、どうしたらよりよい社会をつくっていけるのか

　それぞれの専門分野、実践の場からの気づきをもとに「災害女性学」の構築に挑戦

災害女性学　エンパワメント実践モデル



見えないジェンダー格差

資源（物理的・社会的・文化的・人的）
・運営の担い手のリーダーシップ（市民協同的）
・物理的資源
（空間の提供・資金確保など）
人的ネットワーク(越境的，ローカルの並列）
・女性学的実践知の共有

次世代へつなぐ「女性と防災」@仙台 2019
女性防災リーダーと学生たち　女性学は実践である

元気が出る女性学　その後

ケース1）女性目線で現場を見る―石本めぐみさん　NPO法人ウィメンズアイ（南三陸拠点）

防災・復興からSDGsへ

女性の活動がレジリエントな社会をつくる

学生たちの受け止め：ローカルな男女共同参画の取り組みがグローバルにつながる

変革には数字で示すことが必要：ジェンダー統計の地域ベースでの取り組みという課題

元気が出る女性学　（2）次世代が動く

ケース2）学生のボランティア活動「子どもの命と笑顔を守るために」N未さん（仮名）の取り組み　「わたしの3.11」（当時中学1年生　目の前は海　避難所生活、車中泊、仮設住宅・・・）

誰にも語れない・語らない経験→きっかけは大学生になって他の地域の農業ボランティアにかかわる。「わたしにしかできないプロジェクトがある」　大学で子どもの命を守る防災＋サイエンスをはじめよう　→　理科教育　教師を目指す

おわりに 『災害女性学をつくる』

災害につよい地域・社会をつくる。

ともに地域・社会を再構築する。

そして、ともに災害女性学をつくる。

その担い手は私たち一人ひとりである。

視聴くださった皆さんへ

本講義では主に宮城の事例をもとに「女性と災害」についてお話ししました。

１）あなたの地元で活用できるヒントはありましたか。
２）女性と防災、災害復興について、あなたはどのような取り組みが大事だと考えますか。
３）日常に潜むジェンダー問題、性差別について、あなたはどう考えますか。

感想やコメントをいただけると幸いです。

ご清聴ありがとうございました！（天童、浅野）

主な参考文献・資料

『災害女性学をつくる』浅野富美枝・天童睦子編 生活思想社 2021

「ジェンダー視点からみた広域避難と女性－東日本大震災における支援と女性たちの協働」天童睦子・浅野富美枝　第4回震災問題研究交流会『研究報告書』pp.81－86，2018

『「人間の復興」を担う女性たち』浅野富美枝　生活思想社　2016

『災害と子ども支援－復興のまちづくりに子ども参加を』安部芳絵　学文社 2016

『女たちが動く―東日本大震災と男女共同参画視点の支援』みやぎの女性支援を記録する会編 生活思想社　2012

『女性のエンパワメントと教育の未来』天童睦子　東信堂 2020

防災白書 防災情報のページ　内閣府 2020　http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/

復興庁 多様な視点からの復興への取り組み https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-16/20201012175821.